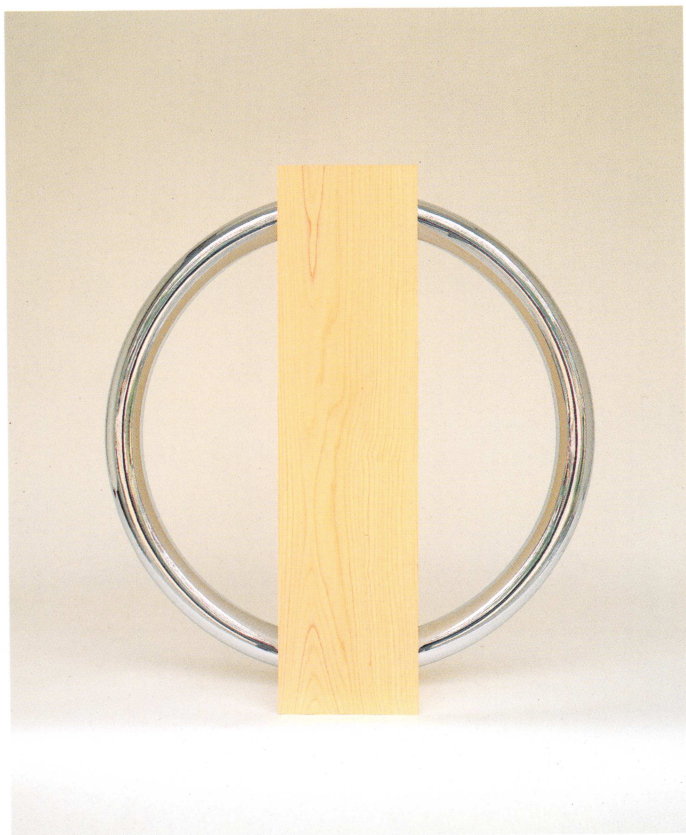


「硬質クロムと木」シリーズ

古久保 三 郎

(撮影 大崎辰雄)



円相 1986年 78×73×22cm



直相 1984年 90×86×20cm



きらめき 1984年 120×40×20cm



受 容 1985年 60×45×25cm



閃 き 1985年 90×60×20cm



虚空 1986年 80×60×20cm

「硬質クロムと木」シリーズ

岐阜県中津川市から下呂へ国道257号線を北上すると、付知狭一帯に日本三大美林の一つに数えられる木曽ヒノキの鬱蒼たる山々が連なる。

私が木曽ヒノキと出会うことができたのは、中津川市に在住する知人から木曽ヒノキの乾燥材を手に入れることができるようになってからである。木彫用材は山から切り出したばかりの生木では、乾燥するにしたがい割れが入り使いものにならない。どのような木でも切り出してから背割りをし、少なくとも二、三年は日陰で自然乾燥させてから使うことになっている。

以来、木曽ヒノキのすっきりとした木地の美しさに魅了されて構成作品の一部として使用してきた。

「硬質クロムと木」のシリーズを追究するにあたって以前から取りくんできた金属素材と自然の木という相反する素材の特性を対比させて、単純極まりない構成彫刻を作る着想を得た。

抽象芸術はニヒリズムを思想的背景にしており、表現の様態としては極めて簡素なものであることの認識のうえに取りくんでみることにした。

円環の金属部分は鋼管をベンド加工し、電気溶接で接合、バフ研磨の後に硬質クロムメッキを施して仕上げ、金属素材として最も適した状態に造形化した。木部にも同じくできるだけ手をくわえ加工することを控えて、木曾ヒノキの持つすっきりとした木地の美しさをそのまま生かせるように角柱に製材し、水鉋をかけて仕上げたものを組み合わせている。

明快さ、簡潔さをねらいとする構成作品ゆえ構成もシンメトリーで単純そのものである。素材の特性が持つあるべき理想の姿をそのままに、最も無理のない自然な様態として提示することに、新しい造形表現の意味を覚えるからである。

伝統的な彫刻作品の場合、それが具象・抽象にかかわらず素材に直接、手を加えて成形し形態表現を通して意味内容を表現しようとしてきたが、その造形過程において素材の特性や美しさを損ない、いわば素材の生命そのものを押し潰してきたように思われる。

私は素材にはできるだけ手を加えず、意図的に形態表現を避けることによって、素材そのものの自然な存在の様態に、現代世界の象徴的意味を表現できればと願い寡黙な制作を続けている。